



認定特定非営利活動法人  
れんげ国際ボランティア会

# みろくの風

Vol  
76



カラワリの子供たち。中学生たちだが、日本と比べ体格が小さい印象を受けた。

-contents-

目次

- インド事業  
カラワリ不可触民地区の調査アグラ視察 ..... 2p  
建築担当専門家 伊藤祐真
- ウクライナ避難民支援事業 ..... 3p  
「日本の高校に行きたい」  
本部事務局
- ミャンマーだより「自立校舎」 ..... 4p  
ミャンマー事務所長 平野喜幸
- 西日本国際財団アジア貢献賞受賞 ..... 5p  
会長 川原英照
- 学校落成式（引き渡し式）に改めて感動 ..... 6,7p  
本部事務局
- ARTICのSDGs現在地その2 ..... 8p  
本部事務局

れんげ国際ボランティア会

当会の活動は皆様からお寄せ頂く  
募金に支えられています

インド事業  
カラワリ不可触民地区の調査

建築担当専門家 伊藤祐真

広大なインド

四方全てに地平線が見える雄大なデカン高原。そこには豊かな農業地帯が広がっています。首都デリーからアグラまで高速道路を3時間。目的地のアグラは白いドーム建築で有名なタージマハールがある町で、これを中心とした観光で栄えています。しかし私たちが向かうのはそこではなく、町の西の端にあるカラワリ地区です。ここは約1キロ四方の広さで、イスラム教徒とヒンズー教徒がほぼ半ずつ、合計約5千人の住民が暮らしています。

下水の臭うカラワリの村

地区に入ると、漂う下水の臭いが第一印象です。埃っぽい通りの両側の下水はコンクリートではなく、泥を掘っただけで汚水は流れず、滞留しているのです。通りは幅約五メートル、狭い裏道は1・5メートル程度。そこにレンガやコンクリートの粗末な家屋がひしめいています。道路のあちこちにはゴミが積まれ、そこで野良犬ならぬ野良牛たちが餌をあさり、日本人の感覚からは見るだけで汚い感じなのです。

1足12円で革靴を作る

この住民はカースト制の最下層にいるいわゆる不可触民の人々で、インド全

体では2億人近くいると言われています。カースト制はお釈迦様より古い時代から続く社会制度で身分で職業が決まります。第2次大戦後はガンジーなどの運動で、憲法により廃止されたのですが、現実には今も続いています。

最下層の人々は差別により、他の人が嫌がるような仕事にしか就けません。ここでは、大半の人が革靴製造の内職で生計を立てています。工場から靴の部品が届き、それを縫い合せて靴を作るのです。1足作って約12円の報酬で、1か月一生懸命働いて千足作って、やっと1万2千円ほどの収入なのです。子供たちも一緒に仕事をする、いわば児童労働もあり、そのため学校に行かない子供もいます。

汚染された地下水

町の下水は地区の外れにある直径約100メートルの溜池に流れ込みます。もちろん浄化槽などはなく、汚水はそのまま浸み込んで地下水となり、いくらか濾過されますが、住民はその地下水をポンプで揚水して飲み水にしているのです。



カラワリ小学校の正門前。道路に放置されたゴミを漁る牛。

地下水は薄い色がついていたり、異物が混じったり、また有害物質を含んでおり、飲み水には適していません。しかし他に水源はなく、安全な水を買う余裕がある人を除き、大半の人がこの水を飲むのです。行政の支援も届かないのです。

カラワリでのプロジェクト

当会では、このカラワリ地区で、3年ぐらいのプロジェクトを構想しています。まず1年目に施設設備の貧弱な学校のリフォーム。子供たちの教育施設かつコミュニティの中心施設として最も大事な建物です。教室、図書室+視聴覚室、庭と教室の間の屋根付きのテラス(渡り廊下)などの新築や増築。そして何よりトイレの増築と整備。こうして学習環境と衛生状況の改善を行ない、結果として子供たちの出席率の向上を目指します。現在は出席率が全体で70%ぐらいです。

2年目は、村の上下水道と溜池の整備をする、きれいで清潔な地区づくりです。もちろんハードの整備とともに、子供たち、先生、保護者を対象に、村の清掃チームの組織化、衛生的な環境の必要性を説く環境学習、通りや下水の掃除、といったことを教育しかつ実践しようとしています。

3年目には、こうした環境教育や職業教育を実行するためのコミュニティセンターの建設を考えています。カーストによって就けない職業もいろいろありますが、たとえばパソコン関係の仕事は新し

い分野なので、パソコン教育を中心に職業教育を始め、就労を促そうかとも思っています。地区の根本問題は結局は貧困で、それが無教育、不就労、失業と繋がり、貧困の連鎖を繰り返すからです。彼らの自立を支援するのが最終目標です。

支援のお願い

プロジェクト資金は外務省のNGO助成金に応募して獲得する予定です。3年前同じ助成金でチベット支援を行ないましたが、それは継続しながら、同時に一般のインド社会に対しても支援の手を広げようと思っています。外務省助成金では足りないことも多々ありますので、どうぞ会員の皆様厚いご支援をお願いいたします。



溜池に通じる道路は、ゴミの山で埋め尽くされている。



授業中の子供たち。机椅子がないので床に座りカバンを机代わりに授業を受ける。

ウクライナ避難民支援事業

# 「日本の高校に行きたい」

本部事務局

2023年2月、玉東ぎよくとう町  
の中学校で生徒が自身の夢や志を発表する「立志式(りっしき)」があり、同中学校に通うウクライナ避難民の生徒も自身の夢を発表しました。



彼女は昨年10月に家族と共にウクライナから熊本県玉名郡の玉東町に避難し、11月から中学校に通い始めました。初めは日本語が分からず、当会のスタッフが中学校の様子を見に行くと「何もわからなくて、難しい」と英語で話しかけてきました。しかし彼女も、最近では学校でも笑顔が見られるようになり、スタッフを見つけると日本語で話しかけてくることもあります。

クラスの友人も教科書にひらがなで読み仮名を書いてくれたり、簡単な日本語で話しかけてくれたりと、暖かくて優しいクラスメイトと共に毎日を過ごしています。

現在、当会は、子どもたちのための日本語を教える専門機関である「NPO 法人・外国から来た子ども支援ネットワーク」と連携し、小中学校での日本語教育の提供を行っています。中学校では、ウクライナ避難民の子どもたちは週に8時間日本語を学び、他の時間はクラスメイトと共に英語や数学、体育といった一般の授業に参加しています。

日本語の授業は専用の教科書を使っていますが、前述の彼女は毎時間きちんと教科書の予習を行い、新しい単語にはマーカーで線を引き、事前に授業で学ぶ単語も覚えてきています。また少しでも時間があれば、日本語の教科書を開いて勉強するなど、とても努力家で、中学校の先生たちも驚いています。

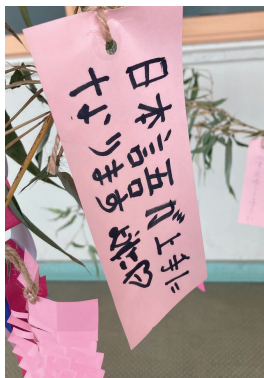


大人の日本語学習の様子

関係者によると、外国にルーツを持つ子どもたちの高校進学については、入試の際の言語や入学後の日本語教育など、課題も多くあるようです。ARTICは、避難民の高校進学を目指し、事前に九州圏内の高校の入試方式の確認や、進学の可能性がある高校には個別に連絡しウクライナ避難民に関する説明を行うなど、彼らの選択肢が広がるよう活動しています。

最後になりましたが、このウクライナ避難民受け入れプロジェクトは、素晴らしい支援体制を敷いて献身的なサポートを行われている玉東町役場や教育委員会、小中学校の教職員や生徒らの協力だけではなく、地域の皆様、それを資金面でバックアップしてくださる日本財団の皆様そしていつもARTICを信頼して心温かいサポートを下さる会員の皆様のおかげで実施できています。

当会は今後、彼女の「日本の高校に行きたい」という夢はもちろん、これからウクライナ避難民一人ひとりの思いが叶えられるよう、日々彼らに寄り添いながら事業を行っていきます。引き続き温かいご支援の程、どうぞよろしくお願ひ致します。



女子学生の七夕の願い

## 避難民の生活

4月の上旬に、ウクライナ避難民の子どもたちとARTICの職員で日帰りキャンプを行いました。午前中は、テント立てや火起こし、カレー作り、午後からはみんなで玉名市にある小岱山(しょうたいさん)に登りました。登山はハードでしたが、子どもたち同士で励まし合いながら、そして職員も子どもたちに励まされながら無事に登ることができました！。また、普段は学校の教室で日本語を勉強している子どもたちですが、キャンプの活動を通して、生きた日本語を練習できる良い機会となりました。

当会は、避難民の来日直後から継続した日本語教育の提供を行っています。子どもたちに対しては、「NPO 法人・外国から来た子ども支援ネットワーク」と連携し日本語教育を提供していますが、大人に対しても、当会が日本語講師を雇用し、各々の進捗に合わせた授業を提供しています。皆さん徐々に日本語が話せるようになってきており、特に子どもたちの言語の習得の早さには驚かされます。



テントを張る子どもたち

# ミャンマーだより 「自立校舎」

ミャンマー事務所長 平野喜幸

いつもミャンマーの子どもたちの教育環境の発展のために暖かいご支援を頂き、誠にありがとうございます。今回は「自立校舎」について報告致します。少々聞きなれない言葉かも知れませんが、まずはその意味を説明致します。

私達 ARTIC のプロジェクトは1年目に村人から建設費の四分の一のお金を集めて、村人と「共同出資」で学校建設することから始まります。しかし実は、

2年目には村人が集めたお金の全額を彼らに返還し、村人はそのお金を元資金にして「農村開発プロジェクト」を実施します。この2年目のプロジェクトでは協同組合組織を作って行い、何らかのビジネスでその協同組合に、つまり村に収益が生まれるようにします。

この農村開発プロジェクトの形態は様々で、その地域に一番あったものを村人たちが選びます。橋を作って、通行料を取って収益をあげる村もあれば、学校周辺に農地を買って、農業を行い、その収穫物を販売して収益をあげる村もあれば、ソーラー発電をして、その電力を家庭に販売して、その電気料で収益をあげる村もあります。ここまでは ARTIC の長年の支援者の方々はよくご存じだと思いますが、実は、この後に3年目があるのです。

この農村開発プロジェクトの第1の目的は、我々が建設し寄贈した学校の維持費用を村人たちが自分たちでまかなうためですが、村によってはこの農村開発プロジェクトの成果で多くの貯金ができ、3年目にはその貯金で自ら学校内に図書館を増設したり、道路を整備したりと、まさに「自立」の具現化とも言える段階に進むのです。

この5月に私は、その1つであるペービンセンナ村での「落成式」に招待されました。なんの落成式かと言いますと、なんと彼らは自らの手でもう1つ校舎を建設してしまつたので、その「自立校舎」の落成式だったので。しかも、その校舎は立派な2階建てでした。



新校舎の前でのテープカット

このペービンセンナ村では当会が2016年に学校建設を行いました。彼らは2年目の農村開発プロジェクトとして学生寮を建設し、その運営を行いました。

ミャンマーの農村では高校が近くにない寮生活をして学校に通う生徒もいます。特に最終学年の10年生の時には卒業試験合格を目指して寮生活をする生徒が多いのです。村は2022年度からの教育制度改革のためにこれまで10年制だった初等教育が12年制に移行し、教室が足らなくなることを見越して行動を起こし、もう1校建てたわけです。コロナのせいで建設期間が伸びたり、物価高騰があったため、建設費総額は日本円にすると400万円を超えたということでした。しかしそれでも学校だけではなく、村から幹線道路に出る新道路の整備も行われました。その建設資金は、2016年の時と同じように各家庭から負担金を徴収して建設しました。

話は少しそれますが、この学生寮では2018年にパナソニック様からソーラー発電設備の支援を受け、電化によって寮生の学習時間が増加し、その結果、卒業試験の合格率も上がりました。更にこの学校は2020年1月には分校扱いのランクから正式な高校（小中高一貫校）への昇格も果たしました。実は私がミャンマーに赴任してからの10年間で、このように自立校舎を建てた学校はこれまで10ヶ所以上ありますが、2階建ての校舎を建設した村はここを含め3ヶ所だけです。

す。そのことからこの村の団結力や自立心の高さが伺えます。この学校はイラワジ管区ベスト5に入るモデル校だと言っても差し支えないかも知れません。

彼らはおそらく今後、第2、第3の開発事業を立ち上げ、これからも自らの手で自分たちの村を発展させていくことでしょう。そして自らの努力で自分たちの暮らしを良くしていく喜びを分かち合えるすばらしいコミュニティを作り上げていくことでしょう。そしてそのコミュニティで育った子どもたちの中から次のリーダーも出てくるでしょう。楽しみは尽きません。支援者の皆様に今回この素晴らしいニュースを届けることができ、私も本当に幸せな気持ちです。

私にとって、このペービンセンナ村の成功は特に感慨深いものがあります。コロナと政変のダブルパンチで、一時はもうどうなるか分からないという状況まで追い込まれました。しかし、皆様の暖かいご支援に心を支えられ、皆様と共に費やした時間と努力、そしてミャンマーの発展を望む皆様の祈りによって、数々の災難を乗り越え、こういった形で実を結んでくれたということは、本当に有難いことであり、これぞ人生の醍醐味であると感じております。また支援者の皆様を代表してこの落成式に出席させていただいたことを光栄に感じ、改めて支援者の皆様に深く御礼申し上げます。

## 「西日本国際財団アジア貢献賞」受賞して

会長 川原英照

去る3月14日、当会は西日本国際財団より「アジア貢献賞」を受賞致しました。この賞は九州・沖縄・山口地域において、アジアとの国際交流や国際協力活動に貢献した団体・個人を表彰するもので、今年で24回目となります。今回は43年にわたる当会の歴史を紐解いてみました。

当会は1980年に勃発したカンボジアからの大量の難民への募金活動から出発しました。当時、蓮華院誕生寺の住職が信者の皆さんへ「同胞援助」という名称での募金活動を始めました。これはアジアの難民の人々を同胞と捉えて、その同胞をお助けするという思いを込めたものでした。間もなく、単なる募金活動から、自らの食事を月に一度断食して頂き、難民の方々の苦難をほんの少しでも疑似体験しながら、その一食分の食費を募金して頂く「一食布施」という形での募金へと形を変えました。これは現在でも脈々と続いています。

そのような中で、行政や国際的な支援機関にその募金を送るのではなく、現地で支援活動を実施している当時の曹洞宗ボランティア会（現：社団法人シャンティ国際ボランティア会）と共に現地での活動を開始し、カンボジア難民支援やタイのスラム支援、スリランカの児童養護施設への支援など、文化・教育支援を中心に活動を広げていきました。

その後、阪神淡路大震災支援や東日本大震災支援活動などを経験する中で、2003年にはNPO法人格、更には2015年には「認定」NPO法人格を取得しました。

2012年からはマンマーに於いて、毎年ほぼ10校のペースで学校建設を行い、これまで累計113校（2023年6月現在）を建設しました。その中で特に大切に出来たのは、それぞれの町や村の人々が総建築費の4分の1相当を住民自ら集めてもらう事を学校建設の大前提とした事です。実はそのお金は学校建設には使わず、学校建設終了時に住民にお返しします。そして次のステップとして、その資金で様々な農村開発事業を村人自身で行ってもらうよう指導し、その収益金で学校を自らの手で維持・運営してもらいます。これによって村人達自身の手による自立した農村開発が始まったのです。



西日本財団アジア貢献賞 授賞式の様子

そのような中、一昨年にはマンマーで軍部によるクーデターが勃発し、マンマーでの学校建設を中心とした農村開発と教育・文化支援は大きな岐路にあります。長期的な支援活動を実施するにはマンマー政府と我々国際NGOとの覚書（MOU）締結が欠かせません。本年は何とかMOUを締結できましたが、来年以降は難しくなるかもしれません。

また、昨年2月からのロシアによるウクライナ侵攻によって多くのウクライナの人々が避難民として国外に脱出しました。ご存知のように我が国でもウクライナ避難民を支援する動きが始まりました。当会では隣の玉東町と提携して、これまでに5家族を受け入れて支援活動を続けております。その内、就労を希望する全ての家族が玉名周辺地域で就労でき、自立のための第一歩を着実に踏み出されています。

当会はこれまでアジアの仏教国を中心に国際協力活動が続けて来ましたが、混迷を極める国際情勢を鑑み、もっと支援対象を広くしなければと考えているところですが、支援対象が誰であれ、当会はこれからも『地域の人々による自立のための支援』を一番大切にしていきたいと思います。

最後になりましたが、このような賞を戴けることになりましたのも、長年にわたる、会員の皆様のご理解とご支援の賜物であること心より感謝申し上げます。





この活動は Artistic Teachers Academy (アルティクティーチャーズアカデミー・略称ATA) と称され、運営や研修内容を当会がバックアップしています。今回の訪問ではターバウンという地域で行われた研修を視察することができました。教師たちは慣れない授業形態で若干の戸惑いはあるものの、皆さん積極的に活発に発言していました。このように、各地域に少しずつ広がっているATAは点から線、線から面へと燎原の火のようにミャンマーの先生達自らでさらに広がっていく予感がしています。「天は自ら助くる者を助く」という言葉があります。「自助努力を惜しまない人には必ず神仏の助けがある」という言葉です。ミャンマーの未来に幸多からんことを願います。

※ミャンマーでの学校建設に於いて、多大なるご協力を賜ります日本財団様には日本・ミャンマースタッフ一同、心から感謝申し上げます。

(終)



ターバウンで行われたATA

## ARTIC ミャンマー 事業外伝

れんげ国際ボランティア会・ミャンマー事務所では平野喜幸所長をトップに6人の現地人スタッフが頑張っています。今回はそのうちの1人、ゾーリン君というフィールドスタッフの紹介を致します。ゾーリン君は7年前に縁があって当会のスタッフとなりました。



研修に参加した教師たちに経験を共有するゾーリン

小学校の頃の彼は優秀でしたが、どうしても一人だけに敵わずいつも2番でした。その同級生は教師の息子だったそうです。そのことで幼心に劣等感を抱くようになりました。でも夢が有りました。船乗りだったおじさんに憧れていて、いつか伯父さんのように強い肉体で自由に世界を駆け巡り、はつらつと仕事をすることです。

中学に入っただけでしばらくすると悪い先輩に引きずられて、隠れて嘔みたばこやお酒をやるようになってしまいました。いっばしの悪を

気取っていたのです。成績も下がり、塾に行くために貰った大切なお金も使い込んでしまいう始末です。何とか競争率の低い大学にもぐり込めたものの、悪い流れは続きます。何とか卒業して外資系の会社には就職できましたが、当時は「やさぐれ」ていました。酒や博打の毎日、夜の10時11時まで街を徘徊していました。今だから言えますが、悪いこともしていました。外資系とはいえ仕事は主にドライバーだったので、先輩に教えてもらった方法でガソリン代をちょろまかして収入にしていました。最初は嫌だったのですが、先輩たちから「夜中だって飛び起きて偉い人を迎えるに行かないといけない、自分たちはこんなに働いているんだからこれはその手当と思えばいい」また「お前だけ(ちよろまかしを)やらないと示しが付かない」とも言われました。そんな荒れた生活が数年続き、家庭は崩壊し、こんな父親に子どももなつくこともありませんでした。

人生を変えたいと思い続けていたある日ARTICの求人が目にとまりました。最初はドライバーとして雇われました。しかし、毎日毎日村に行き、ARTICの行う活動を見聞きしているうちに「自分もこの仕事をやってみたい」と強く思うようになってきました。

ところで平野所長は時間に厳しい性格で、村に行く日はいつも朝日が昇らないうちから出かけます。村人を待たせてはならないからです。村までは4時間、5時間とかかることもしばしばです。ある日ゾーリン君は平野所長と朝5時に待ち合わせをしましたが、10分早く着いていました。するとその次の待ち合わせでは、平野所長が5分早く着いて待つ

いました。平野所長を待たせるわけには行かないので、その次は5分早く待っていました。その後お互いが少しずつ早く来ますので、最後は4時半になりました。このようにゾーリン君は日本人の行動を見て学び、時間を守ること、人との約束を守ることの大切さを知り、実践していくようになりました。今ではゾーリン君は平野所長の片腕としてARTICにはなくてはならない存在となっています。

彼は時にはうまく進まない学校建設委員会の村人たちを説得し、後押しをします。また、教師育成研修会においても、先生達に自分の苦い経験をもとに講和を行い、生徒達の心理状態を話し、教育の重要性と教師の持つ大切な役割を説いています。



講義を行うミャンマー事務所長平野

(文責・久家誠司)

# ARTICのSDGs

## 現在位置(その2)

本部事務局

昨今、SDGs目標達成のために、「個人としてはどのように貢献ができるか?」、という疑問がよく議題に上がっています。

個人のできる取組みとして、フェアトレード商品(フェアトレードとは発展途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することを通じ、立場の弱い途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す運動。)の率先的な購入、自宅での水や電気の節約、ゴミのリサイクルなど、会員様の中にも、日常的にSDGsを意識され、既に実践をされている方も多くいらっしゃるかと存じます。当会は1980年より、国内外で教育と福祉に関する活動を行っていますが、振り返ると、歴代の会員様のご支援とご声援そのものが、現在の当会が取り組んでいる活動へと繋がっている、と改めて感じております。

### SDGsの先駆者

遡ると、1989年から2018年まで、皆様のご協力を頂いて実施しました、タイのスラムにおける図書館活動では、トラックを図書館に改造し、移動式図書館を利用し、子どもたちが絵本や本に触れることができる機

### SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



会を創出しました。質の高い教育を受けることが難しい子どもたちに対して、本の楽しさを知ってもらい、読書という体験を通して学んでもらう場を提供致しました。このような図書館活動の目標は、なんとSDGsのゴール4.「質の高い教育をみんなに」の項目における、「すべての人々に包摂的かつ構成的な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」という目標と合致するものであります。また、1998年から2009年にスリランカで実施しました、小規模水力発電事業は、現地において環境に優しく、人々の生活の質向上のために農村地で実施されたものです。小規模発電事業により、まだ電気が通っていなかった地域において、日が落ちた後でも、子どもたちは勉強をすることができるようになりました。このような水力発電事業は

SDGsのゴール7.「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」という項目の、「すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する」という目標と重なります。



移動図書館を楽しむタイの子どもたち

当会設立以降、40年以上もの間、活動を支援して頂いている皆様は、SDGsが世界で提唱されるよりずっと前から、教育問題やエネルギー・環境問題を世界的な共通課題であるという問題意識を抱き、寄付活動を意欲的に実践して来られました。SDGsの先駆者である皆様と共に、現在まで活動を共にすることができたことに職員一同、心から感謝致します。

これからも皆様と協働して、SDGsが達成され、世界の人々が平和で幸せに暮らしていける社会を実現できるように、日々邁進してまいります。

第76号 2023年(令和5年) 7月

季刊/みろくの風 (れんげ国際ボランティア会会報)

発行人/川原英照

住所/〒865-0065

熊本県玉名市築地2288

電話/0968 (73) 4851

＼SNSで活動を知る／

Facebookは  
コチラ→



Instagramは  
コチラ→

